長乃うさ橋

宇治巻　十

[V. 54]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 54
copy 1
Asian
Japan
Case

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

やまにおいしまして、例をさせ給やうに、理仏などくやうぞさせ給。まるの日はよりはにおいしられば、僧都おぼろきうしこまり、冥れにふ蓋しごろもれいのりなどにつけかたらひ給かれどことにいとしたしきことはなりけるを、これたび一品女一宮のれこちのほどにまさらひにへるに、すぐれにへ弟げん抱し給かりとこにてよりこにはなうたうとひ給て、今はこしかるさちざりくもへにてがれば僧都心をもくしうおもする夜蓋のかくけざとおもしたることく。もてさもぎこさて給れ抱鏡などこ夜やうにしておもすれば、れゆづけなどまいり給。すこし人ぞしづ

まりぬるまを（芸詞）のくつたりまたりまへるやどりや
侍るとくひまへば（俗歌詞）たゞ侍いとことやうなるところま
なんなるまがしが母なるくちあまれ侍を家まぞう
ぞうたきすまうも侍るぬうちまうくてこもり侍
あひだは夜中（よ）曉（あつき）まも あひとふらもんとおもひ
まへとさて侍など申給そ（芸詞）のまたりまはたゞちうき
しろほひまで人おほうすま侍けるを今はいとうを
うまこそなりゆくめれなどのまて今すこしちうう
ねよりて思びやうまいとうきたる心ちもし侍り
又たゞ口きこえんまつけてはいかなりけることより
かと心えぬおぼされぬべきまうたぐもぐうれ

侍れど、波山里にしるべき人のうくろへて侍やう
にきくしをこしうまてこそはいかるさ海まて
なども、もらし聞しめすぞ、むかつほどなり此
ごしにありて、いむことなどさづけなてぞりとさ
侍は海ことかまぐ遠もつく、おやなどもなりし
人なれば、こゝにうしなひさるやうにかごとかくな
ひとなん侍をなどのなふ信頼されどよこ人と
えしざりし人のさ海ぞうしかくまでの給はかろ
がろしくはおぼされざりける人にとてあれと
むつに法しといひながら心もなくこちまちに
うちをやつしけることもむつぶれて、いつら色

ことしんやうせひまもちろうしかるをきくなへるに
こそあめれ。ぞうり心しなひて。うかぐひさげ。
給いんに。かくれあるべきことにもあらぬ。なかく
あらがひかくさむにあいなかるべしなどぞぞうり
せひえて。いかなりけることにか侍けんと。これ月
ごろうちくにあやしきせひなふ人のれこと
にやとて。かしこる侍あまどものもつきる乾侍て
まうでくへりけるこちる。宇治の院といふ所に
さくまりて侍けるに。大尼の何まのちうげ。にはかに
とこりていたくなんワづらふと。つげる人のまうで
きたりしかば。まうりむかひたりしに。まづあや

しきことなんとさくめきて。おやのしるまゝ人なり
とがさしをきて。もてあつかひなげきてなん侍し。
此人(浮)もなくなりぬへるさ海ちなどら。さすがにいきい
ちよひておりしそれが芳物語に。ふ海爰に亜(とき)たり
けん人のことひをしきて。さやうちなることにやと
めづらしがり侍て。弟子(でし)がらの中に。げんあるもの
どもをよびよせつゝかたりぐまうぢをさせたすど
なんし侍けるなまがしいおしむべきよいひなら
祿ど。たゞ(大尼)の猿(さび)のそらまてやまひをもきをこすけ
て。念佛(ねんぶつ)もこゝろこゝぞれどをさせんと。佛をゐんじ
こてまつりし給へし侍ぐに。その人の侍りさ海くい

しくもこゝへぎなん侍しことの心をしりせひ
ゆゑにてんぐこゝ風などやうのものにおぼむ
きゐてこそまつりけるにやとなんうけ給りし
こすけて京にゐてこそまつりて後も三月(ミつき)ばりは
なき今までなんものし給けるとなまがしがいも
うとこ米(むしんのこ)の和のるまて侍しが尾になりて侍
なんひとりもちて侍し女ごとうしなひて後(のち)月日
はおほくへだて侍しかどかなしひこゝぎなげきな
ゐへ侍におなしとしのみとくなんこゆる人ゆゑ
うちいとうりしくきゝうなりをこいでこそ
まつりて親者(しんしゃ)のゐへるとよろしびさて此人いる

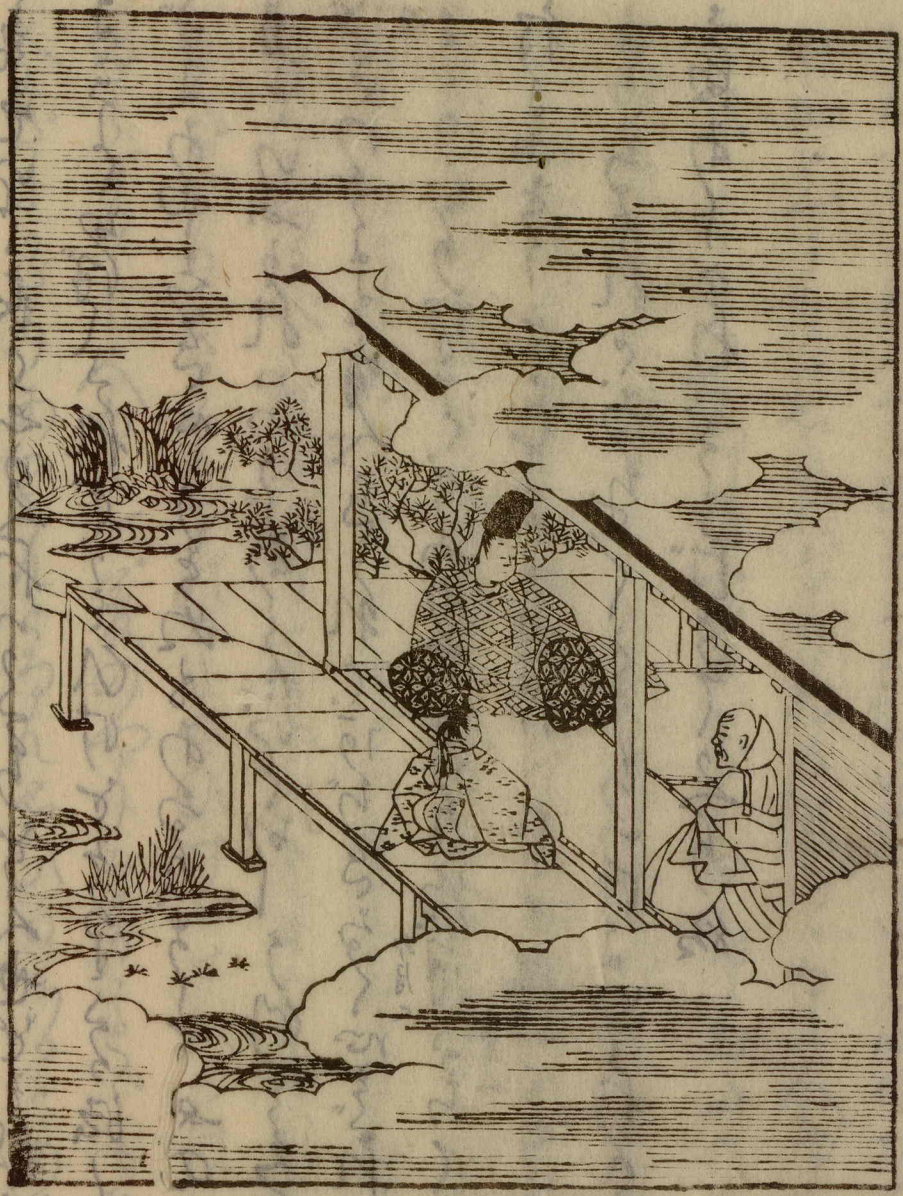
げらになしてまつらじとまどひいられて、なく
なくいらじきことぞ申されしかば、のちなんかれ
さらもとに身づからおり侍て、ごしんなどつかまつ
りしに、やうくいきまして人となりのべりかれど、
猶このらうじたりけるものゝ、身になれぬ心ち
なんする、これあしきもの、さ面にげとのがれて、後の
世をぶぶんなどかなしげにの給ことぐもの侍し
かば、法しまていすくめも申べきことにそも
とて、面ことにすけ出家をしめてまつりてしに侍る。
さらに志ろしめすべきことはいでかそらに
さとり侍らん、然づらしきことのさ面にもあるを。

世ぞうりまも志侍ぬべうしかど、ゆゑありてゆづら
ましかるべきことまもこそと、これおひべどもしな
さくとて、此月ごろをとなくて侍つるなんと
とぬへば、（慧心）さてこそあるれと、ほのきくてかくまでも
とひいでぬへることなれど、むげまちきく人とせひ
もてまし人を、さはまことまあるまこそいとおぼす
ほど、夏の心ち、志てあさましかれば、いくこもあへず
泪ぐまれ給ぬるを、私僧都のいづしげなるまかく
までこゝもべきことかはとせ返志て、つれなくもて
なしぬへどかく（僧都心）見しけること、この世まいなき
人とおもしやうまなしうことまおやまちしたる

こちしてつゝみかれば（詞）おしきもれまらぬ
ぞこれ給けんも。さるべきさ記の世の契なり。むかし
こゝき歌のこゝろこそもれし給けめ。いかなりおや
まちまて。かくまでもぶれ給けんにかとひ給
へば（蕉詞）な雨ワんとなりなどいふべきすぢにやあり
けん。こゝにももとよりワざとむひしことゝりも
侍らず。もれもらるくてこつけそめてハ侍しかど。まだ
いとかくまでおちあぶるべきくいとはむひこまへ
ざりしをめづらかに何ともなくきえうせにし
かば。身をなげこかにやなど。さ雨ぐにうこがひ
おほくて。こしかるかことハえきて侍らざりつゝに

なんつまうろめて抱きてなれば、いとよしと心やすく
なんまづらいたまへなりぬるを、田くなる人なん
いうじくこひかるしふるをかくなん罪出さうと
つげたしをまほしく侍れどつきごろかくさを給
けるほいさぶつやうに抱きたがしくや侍らん、おや
この中のたひさぶかるしひにさへでとふらひ
抱しなどし侍なんしなどのまて、さていとびん
なきたるべとはおぼすともかれさもとにおり
まへがげりきてなれめにたひすぐすべくはた
侍らざりし人なるを、爰のやうなることぐもを、
へぶにかたりあはもんとなんたひまうらこの給

気色いと哀しとおもへればかうちとへ世をそむきき
まことおぼしけれどかうこひげをそりて法し
ざまおやさき心いうきぬもあるりまして女のれ
あといふもれはいうおんいとおしうりきこえ
べきけざまも有べきれどはづきあすく心とぶれぬ
おりありむことゝふあすさゝり侍御うちての
何まれとうそこそうさせ侍しんと給いとこころ
もとあそれどあまたくとうちつけまいうれんも
さ後あしゝればさゝしばとそてくり給



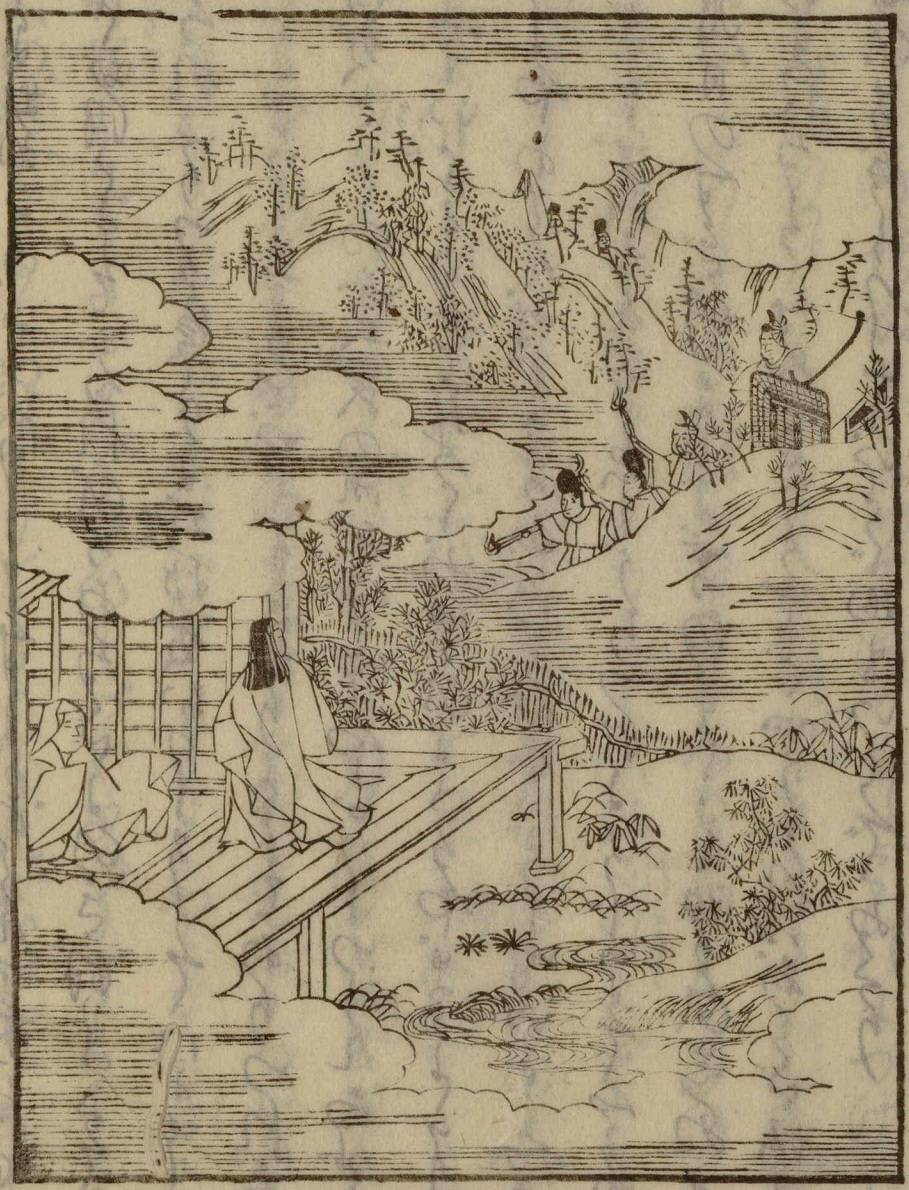
（浮ノ）れをうとれつゝは（蓋ノ）れともよみておりしかりけりこと
ゆゑしどもよりはかたちもさよげなるをよび出給
て（詞）これなんその人（浮）のちりさゆりなるをこれをかけ
がつ拙をんれかゝひとくだりこまへその人といなくて
こゝろ○こゝしゆる人なんおるとぞうりのうろを
しるしをこまへとの給へば（僧都詞）なるよがしこのしるべまて
かなしずつこえ給りなんことのあさ夜はくらしく
とりやつ いまは こゝれ こづくしこちよしをみて
あるべからんことは拙をさせ給はんまなるのかゝがく
給らんとやこまへば（蓋）うちつゝひて けこえぬべき
しるべとおもひなし給らんこそこげかしかれこ

こまはぞくのうちまで今まですぐもちんいと
あやしきいまけちまりしより、せふうろざし
かくはを三葉の女三のうろぼそげまで、このもし
げちき男ひとつとよすがに見しうろがさりがうさ
ほぐしまおぼしはてがづらひ侍つるほどまをの
づらくらねなどいふともたくなり、男のをさ
ても心よりひがうくなどして、せひながしすぎ
侍ほ、又えさしぬともかずのこそひつてすぐをど、
おほやけはいとくしまのがれがうさしまつけて
こそさもまべしめ、さしでは仏のをいし給うたん
ことと、ひづるまもてくとよばんことはいかでおや

まさごとつくしまて。そろのうちはひぢりは
とさり侍らぬ事を。ましていとちゐさくとも
つけてしもとまさつゝうべきとはなどてかたひ
ぬへん。さらはあるまじきとは侍。うさがひおぼせ
まじ。さぐいとおしきおやのさひなどをきてあき
らめ侍らんづりなん。うれしう心やすうべきなど。
苦しうはかくつもしかるの心をきて（だんとイ）くり給。傍歌も
げまとうれづきて。いとさうとさるとなどきこゝ給
程は。目もくれぬれば。中（蓋ん）やざりもいとよりはぬべ
かれどうはのそらまてもれしさんこそ。れびんか
うるべかれとさまづらひて。かりぬは。けもうとれ

ひしきを俗都めとぐめてほめのふ。これにつけて
まづほのめしぬへと思へぬへば。かこりきてさしを給時
は山にかりしてあそびぬへよ。すぐろなるやうにはおぼせ
ちじきゆへもあるりと。うちうちひ給。このこは心もえ
ど。文さりてれともにいづ。さう中にあれは。ぬぎんの人で
もうしうちあがれて。悪びやうをなどの給。小望には
いとかくしがりうる。青紫の山にむかひて。まぶるく
ことなく。やまうづのほうがりを。芳光ゆりなぐさめ
にてなぐめぬへるに。れいのもろうにこやうに。吾乃
肝腸より。さき心ことにをひて。いとおほうともしうる
火のれどうるしぬひうりをうとして。尼君ぐちもし

しま出ぬうり。ふがかりしまするあらん。此前ぬ
いとおほくこそこゆれ。ひるあるまひさぼしこそ
まつれうりつる。ほうまは。大将殿かりしまして。此おほ
のことよいうまするを。いとうきおりとこそありつれ。大
将殿といこの女三宮の此おとこまやかりしつらんなど
いふもいとこの世とをくぬ中びまうるや。まことすり
さまやあらん。時ぐうる山路もけかはし時。いとしる
うりしずいぜんのこゑもうちつけまじつまて。四方も。
月日のすぎりまくは。芳のことくくおもひ志ぬも。
いまはなまくすべきことぞと心うそれがおこぶ。私は
ちひまぎらいして。いとぐ物もいらぐぬうり



地横川まかりふ人のこゝろん。これ口たりまはちうき
こゝろありけり。かれとのき。これ子をやがてや
らんとおぼしけまど。ひとゑんおぼくてひんれ
なれば。夜まかへりぬて。まこの目ことゝろまぞ
いざしこそ給。むつましくおぼせ人の。ことくし
かしぬ二三人ばかりをくりまて。むかしもつゐま
けかたしく。僧が子へぬへり。人こゝろぬまよびよを
ぬて。おこがうをましいまうとれかゐまおぼゆや。
いまは世まゐさ人とおもひたてましを。いとうし
かまこそもれし給なれ。うとき人まはこゝろをじと
おもふ氏。いさて弱よ。ちくまいまうしこゝまいあな。

中くおどろきさはがんほどに。しろまじき人を
しるしなん。そのおやのれおもひのいとおしさり
こそ。かくもさげぬれと。まゞさるいとくちがるめ
おを。おさなき心ちなも。けらかるはおほかれど。これ
君のかたちをば。よろ抱なしとしひしたりしに。
うを給まかりとアルて。いとうるしとおもひけるに。
かくのみへば。いとうれしさまも泪のおけるをしらず
しとしひて。まゞしりしに。をくとあらくかに罪し
ぬるり。かしこまはまゞつとめて。御都のれもし
里。よべしね夜のれ使まて。こ君やまうでぬへりし。
ことのうろうけ給りしに。何ぢきなく。かへりて。

おくし給てなんと。姫(ほ)君まゐらしめへ。ぐづくし罪
さすべきことも知明れど。ふかあすもぐしてさふ
らふべしとうさめへり。これ(尼充詞)いなまごとぞと。おま君
おどろきて。こなたへ(ほノ方)もてつたりてこをなりめへば。
面(なほ)でうちあるゝて。抱の罪しあるまやとくるしう。
抱ぐしたけるとうしみられんをさひ川ぐくるま。
いしんたるなくてゐめへるまな。紙(尼充詞)の給ちをしまて
ろうく見し。滿(つぐ)つることく。いとじくうらゝて。こと乃
心をたしるゝ。おはたしたきまでたひねたるほどま。
山よりそうげの此をうそこまて。まいりたる人なん
あるといひいれたり。おやし(尼充詞)それどこれこそし

さはたしかなる所をうそこなしめとて、こなるこまと
いたをこれば、いとゝ(浮ノ甘うと)あけよ志和やかなるつらものえ
ならずさうぞきたるぞあ也こゝさるゝ、つらうにさし
出されば、せごれのもとるつゐて、かやうにても
さふし奴まじくこそは僧都ハの給しかやいへど、
あまぎ君ぞいへなどし給ふこゝちりいれてこれば、
入路(まうぐ)の姫(浮)君の所なるに、山よりとて名かきぬへ事、
あらじ(浮ん)などあらがふべきやうもなし、いともしらな
なく見えて、いよくおくのるにはいられて、人な
かもこあるを給ひず、つゐもほうりかなしぜもれ
し給へがらなれど、いとうこそ(尼光詞)心うしなどいひて

僧都のれいこみれば、けさ（みノ衍）袈（こて）に大将（茎）殿の掛しなて
れ（浮ノ）ありき夜さぶらひ給ふ。たしめよりきしやうく
たしくきえて侍ぬれ心ざしふかりけるれ中をそ
ひきなて、あやしきやまがつのあるかり、すけし（出家）
なへることかつりては目とけのをもそふべきことな
なをなん。うけき夜たりおぞろさ侍いかゞもをんも
とれれ、ちぎりあやまち給ひて、あひしうの川に紙
たるかし男しなて、一日（いちにち）のすけ（出家）のくどくいたりなきものし
なれば、れこれまをなへとなん。ことくにはこゝがら
さふらひて申侍らん。かけぐこれ小君をそして給て
むとかいたり。まがふべくもあらぬさあきら先

ゆゑれどこと人は心もしずこの志を誰(尼志行)にかおもはと
らん。れいと心うし。今さへかくあるがちなりへぞて
さを語とをめられて。すこし(ほん)とぞ面にむきてこう語
へば。この子は今はと世をもひたるとしタぐれにも。
いとゝひしくもひし人なりかり。おなじところ
にてこしほどはいとさがなくあやまくにをぐりて
にくりしかば。母のいとかなしくして。うぢにも
時ぞおそおもしかば。すこしをとすけしまくり。
かゝこゝにおもへりしつゝは心をもひ出かにかゝ夢志
やうなり。まづ母のありさ面いとゝしまほしく。こと
人ごのうへはをのづしやうくきゝそぶし。おや志

かたすらんやうも。ほのかにもえさうぎうしと。中々
これをうるに。いとかなしくて。ほろくとなるれ
ぬ。いと（尼恋ん）おしげにて。すうしうちなげし。法屋る
心ちもしれば。れ（詞）もしらかしまとそおたすめれ。さて
まほしくなげしとともあらん。うちにいれてまゐ
らんといふ。何（詞）かいまは世にあるものとも心も
ざらんに。あやしきさ海にかもがちりして。ふと
えらんもたづしとおもへば。とぞうりさあらひ事。
けにへぞてありとも。なげしなすらんがくるしさに。
それもいたれでなん。おさましかりけんありさ海も。
めづらかなることとこゝめてげんを。さてうれし心

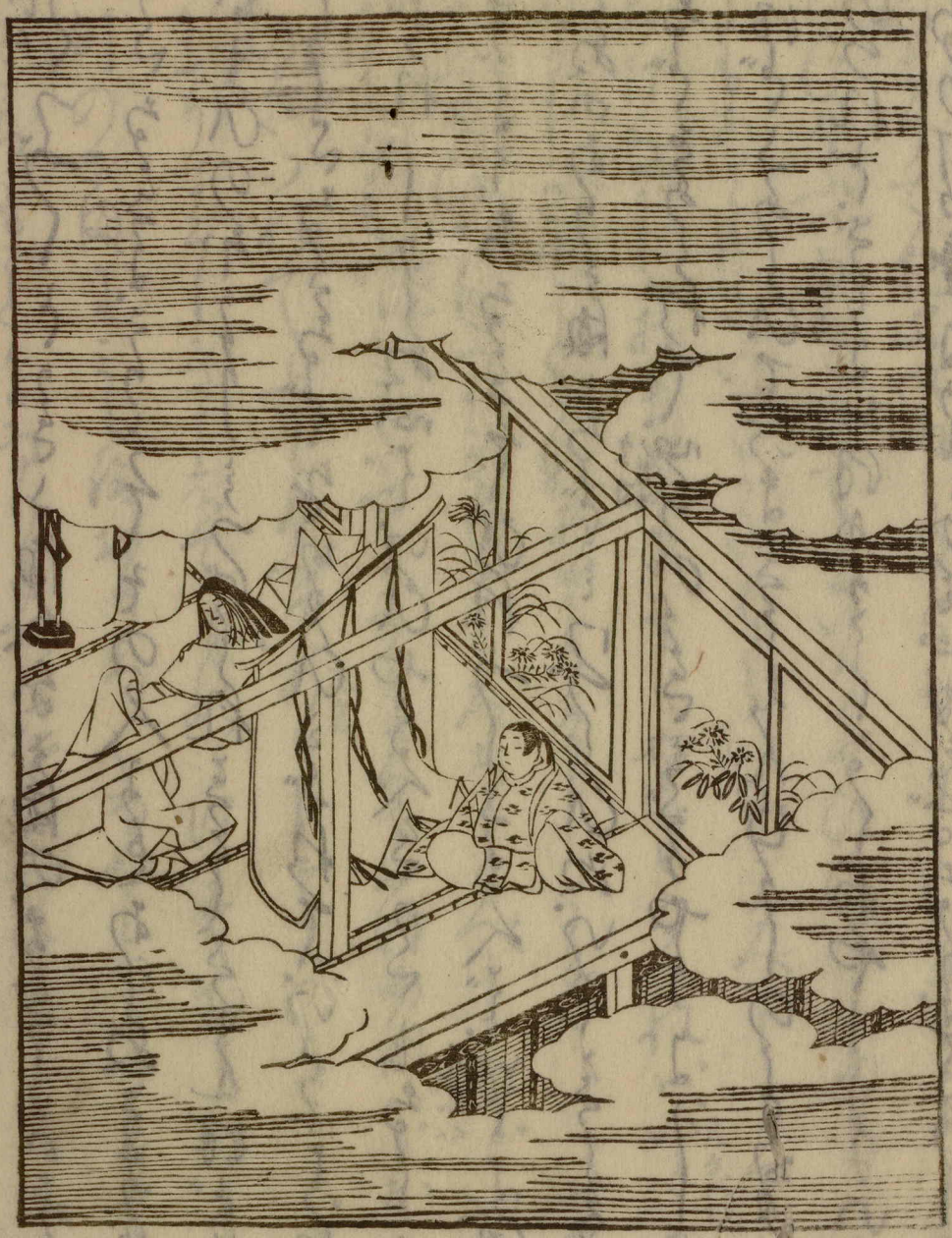
もうせ。むしゐなどいふんもれもおしぬさ海に
なりにけるにやあらんいかにもくすぎにしかる
のこと紙。紙なぐしさしにえせひ出ぬり。これかこ
とかあるし人の世の物がたりすありし中になん。
こしあたりのことにやとほのかに聞ひ出しかる
ことあるうちをしそのうちとさ海かうざ海にあ
ひてこれどさしにもかぐしくもあぼしぬる。
ぞひとり抱し給し人の母いかでかとをろかなしぞ
あはひたありし紙。まぐや世におもすらんとおもは
ぐかりなん心にもなれずかなしきおりく作かに。
ふこれは此けしものほはちいさくてこしうち。

すなはも。いとしものびがるゝれど。いまさしまうゝ人
まも。ありとはしられでやゝなんとなんなれ侍る。
それひ(母)ともしらるまれし給はゞ。それひとなり
なんこいめんをまほしくなりひたべる。このそうげ志
のゝ聞へる人などまほ。さしらるありとしられなら
じとしてしひ侍れ。まへてひがことなりなりと
笑なしてまてくしまへとのまへだ。いとかゝい(尼玄約)
ことれ。そうげのれ心を。ひじ。里といふをまを。
あまりく面なくまれしまへだ。面さるのゝひてを
をそしこまひてんや。後よくれあしじなれめる
ろゞしさはほどまもおもしまさずなど。いひ

さはぞそ・せるしてずらうつくおもしまさると
ぞと・これのひあらぬをそて・まやのうちはまことにて
（小君と）われなり・此子もさはきゝつれど、おさなければふと
いひよらんもつゝましけれど・また侍る（薫ノ）御文いかで
たてまつらん・そうづの御しるべはたしかなるを・
くおぼつかなく侍るこそとふしめにていへば・そゞ（尼君詞）
や・あなうつくしなどいひて、御文御らんずべき
人は・こゝにものせさせ給めり・げそうの人はいかな
ることにかとこゝろえがたく侍るを・なほの給は
せよ・おさなき御ほどなれど・かゝる御しるべに
たのみきこえ給やうもあらんなどいへど・（小君詞）おぼし

へだてゝ。おぼくしくもてなさを給ふに。何ごのをうさ
こし侍らん。うらく覚しなりにそれば。男女べきことも
侍らず。さゞこのれふる紙。人づてなしでこそまつれそ
侍りつゝ。いかでなしんといへば。いとことりなり。れいと
うくうこそなおかをそ。さすがにしくつけきれ心にとそ
と。男しうごうして。本のもとにをしたをなりこれば。
あれ(ほ)おもあらでぬぬへるけれひ。と人にはりぬ
こちまれば。そこもとりよりてこそまつり川れ(小忘詞)
へりとくに成りてまいりなん。とうくうとくし
き紙心うしとせひていそぐ。おまぞれ姫にひさ
とさてこをこそまつり。おりしなりしのれもにて

かこの香(か)など例のよづぬまでしこうり。得のうり
こて。例(比)のもれめでのさしすぎ。べいとありがたく
おりしとせんべし。さしは(文句)ゆれんうるなく。さ夜ぐり
つこをもきれろろをば。そうげにおもひゆうしき
こえて。いまはいつであきましうりし世のゆゑん
がうりをぶるといそがるく心の。けれなぐらもどうしき
まるん。まして人めはいうまとうきもやつま給もず
法(慧のり)のしと。鶯(うぐ)ぬうたをしるべまでおもいぬ山に
ふきまどふれ。この人(小意)はこやけまれ給ぬらん。うくは
もゆくしるなきれうるこうまこうもれまでなんなど。
いとうまやうなり



げん
くぶしときこ殿人がきのおぶらいかさん
うちはさりとてその人はもあいぬさめ紙
おもひのかけりうけれとこしこんほどの
もこちすぎあづをおもひこぶれていとびうれ
だれしりぬ心こいひやるべきうくもあしさ
すゞまうちあそてひれかしまへだ尼衣にいとげ
あはれおりき殿がちぎこワゴひぬいぶこきえん
あざをあらわれて浮詞心ちのこゝぶりやうなし給
ほだしあひてつまここえんじしのことまも
かれどもきこまあばゆかことあくおやしういり
ありける事まうくのこ心もえずちんざらし志

げまりてや。此れふミなどもミしらすことをお
らむ。そふいなをもてまいりぬひ。こころこゝ人
まもあらんに。いとかなもしらいるゝなべしとて。
ろげなゞらあまだるさしやまぬれば。いと尾宗詞アん
ゞるしされことゝれ。おまりなしゝぬもこゝて
まつるひともつミさりごころなるゝべしなどいひ
さも。ふも。いと浮山うゝてさゝまくおぼゆれば。かかも
ひさゝいれてふしぬへり。おるじ尾宗ぞこのきミに。ものゞ
ぐりすゝしきゝえて。もれくけまておもすゝん。
例のさ夜にこゝし給ありなくなやミやうりなて。此
ゝちもことにありぬへるをふづ。きゝて給人

あらばいとゆづらりしかるべきれことゝ。こゝろて
まつりなげき侍しもしるくかくいとゝあはれに心
ぐるしきれことゞもれ侍けるを。いつ面なんいとかな
むけなくせひ侍る。日ごろもこゝろうちもんなや
まを給めるを。いとゞかゝることゞにおぼしこゞらく
もやつゐよりも抱荒しさを給はぬさ面にてなんと
きこゆ。一ぬまつけておしきあるじなどしたれど。
おさなきゆちはそこはしなくあはてこゝろこゝろ
してけざしなれさをかへるしるしにおまごとを
は罪しさをんとすらん。こゝ一ことをの給はせよ
りなどいへはけるなどいひてかくなんとうつし

かれども。拙(浮)ものゝ夜ちゝ。いかひなくて。ふくく(尼宮羽)
おぼつかなき此宵猶を。ふくしさを給べきなめるを。
雲のけかりまへぶらぬ程にも侍めりを。山風ふく
とも。まこもかるゝずこちよりを給ちんかしと
いへば。すぐろ(小宮人)ゐくらさんもおやしかるべけれ
ば。かへりちんとす。人きれぞゆしきれありさ夜
をもえらずなりぬりを。おぼつかなくくちおしくて。
こゝろゆかずながらまいりぬ。いつ(慧)しかとまちおも
するに。かくこどくしくてかへりきこれば。すさ(慧人)
まじくちかくなりと。おぼせことさ夜ぐまて。
人のかしすへこゝろやあらんと。けかれこゝろ志

[illegible]

[illegible]

[illegible]

字本云

柳氏本者以後崇光院宸翰桃花入道殿

下被再治之者也尤以為證本者也惣

而八種異本在之

永正元稔七月日　台嶺末学權僧正在判

源氏物語之書行于世也尚矣然諸家之本頗有同異開闔清濁不分明不能令讀者無遺憾焉僕自蚤歲志倭歌之道研精覃思從一讀後成卿之言潛心此書握玩不釋手或問明師而受口授之奥義或從朋友而决狐疑與鳥焉粗得梗概也須聚數本參諸鈔校同異訂開闔分清濁點句讀且傍註誰某詞誰某叟等聊初学之捷徑也古來有繪圖書中之趣者今亦於謌與辭之尤可留心之處則

附以臆見更增圖畫僭竊之罪無所遁逃然依
圖知事依事知意則亦婦人女兒之一助也乎
嘗聞以紫吏部之筆比關雎之篇則字詩賦
之輩亦不可不讀之書也而況於倭謌之徒哉
以書陽述冶態艷情而陰垂教誨監戒所謂變
風止乎禮義者亦紫吏部之微意也善讀者
當須極其情而歸之正也仍今并山路露系
譜同棄等付剞劂氏鐫梓欲廣行于當世永
傳于万年矣非敢射利只欲善與人同者也尚

謬誤必多博覽之君子幸正焉于時

慶安三年仲冬蓬衡蕞品山氏春正謹跋

永應三甲午稔八月吉日

洛陽寺町通

八尾勘兵衛開板

69038
64P78